

¡Feliz cumpleaños! / Feliz aniversário! / お誕生日おめでとう!



ホセ・アルフレード・  
ヒメーネス  
José Alfredo Jiménez  
(1926-I-19, México)



ナラ・レアオン  
Nara Leão  
(1942-I-19, Brasil)



エンリーケ・フランチーニ  
Enrique Mario Francini  
(1916-I-14, Argentina)

高場 将美  
(1941-I-19)

——この写真はたぶん1974年のもの

うた：峰 万里恵 コントラバス：齋藤 徹 ギター：高場 将美

## 第1部

### 1. ラス・マニャニータス *Las Mañanitas* (メキシコ)

伝承曲 *canción popular*

敬意・愛情・友情などをこめて、贈り物がわりにする歌セレナータの1種で、祭りの日などのマニャニータ（朝ぼらけ。夜が明けたばかりの時間）にうたったのが起源ですが、午後や夜にうたわれるほうが多くなりました。いくつかのヴァリエーションがありますが、いちばん人気があるのは、誕生日パーティに不可欠となった、これらの歌詞、これらのメロディです。

これが、ダヴィデ王のうたっていたマニャニータス。きょうはあなたの誕生日だから、ここでわたしたちがあなたにうたいます。

目を覚ましなさい、いとしい人。ごらん、もう夜が明けた。もう小鳥たちはうたっている。月はもう隠れた。

なんときれいな朝。わたしたちはみんなやって来た、楽しくうれしく、あなたを祝福しに。

あなたの生まれた日、すべての花たちが生まれた。洗礼の水盤では、ナイチンゲールたちがうたった。

もう夜が明けてくる。もう朝の光がわたしたちに当たった。目覚めなさい。ごらん、もう夜が明けた。

わたしはお日様になって、あなたの窓から入り、あなたにおはようを言いたい、ベッドに寝ているあなたに。

わたしは聖フワンか、聖ペドロのようになりたい、あなたにご挨拶に来るため。空の音楽といっしょに。

ジャスミンや花たちといっしょに、きょうわたしはあなたに挨拶に来た。きょうはあなたの誕生日だから、わたしたちはあなたにうたいに来た。

### 2. ため息の橋

### *El Puente de los Suspiros* (ペルー)

作詞作曲：チャブーカ・グランダ *Chabuca Granda*

19世紀末～20世紀初め、ペルーの首都リマの貧しい街で、アフリカ系の混血の住民たちが、優雅なヨーロッパの舞曲ワルツを、歌とギターだけで勝手に即興演奏しているうちに独自のスタイルが生まれました。ワルツの3拍子に、2拍子（8分の6拍子）が融合したり、ぶつかり合ったりする、すごく自由な音楽です。1920年代には、いわゆるジャズ的な緊張した和音の導入で音楽的な豊かさを増し、歌詞も物語をもつようになりました。

ペルーのワルツは、全般的にはセンチメンタルな男たちの歌ですが（歌手は女性も多いです）、女性作者チャブーカさん（アフリカの血はもっていません）は、街とそこに住む人々への愛情、伝統的なペルーの感性への敬意にあふれた、数々の傑作を生み、ペルーのワルツに奥深い魅惑の世界を広げました。この曲は、彼女が少女時代に住んでいたリマ南部のバランコ（崖）地区をうたっています。

かわいい橋、隠れている、葉の茂みのあいだに、追憶たちのあいだに。伸びている、とある谷間の傷口の上に。おまえの材木たちは、思いの芽を出す。心は、おまえの手すりにしっかりとつかまる。

わたしの橋は、いつも午後は、わたしを待っている詩人、静かな木組みといっしょに。そして橋はため息をつき、わたしはため息をつく。彼はわたしを迎え、わたしは彼を置いて去る。橋はひとりぼっち、彼の傷——彼の谷間——の上に。

### 3. アブスルド (不条理) *Absurdo* (アルゼンチン)

作詞：オメーロ・エスポーシト *Homero Expósito*  
作曲：ビルヒーリオ・エスポーシト *Virgilio Expósito*

1940年代のタンゴ歌曲に革命を起こした若い兄弟の作品です。甘く悲しく、そしてにがい……タイトルに、実存主義などでよく使われることばをもってきたあたり、そのころのタンゴ界には「新人類」の登場と思われたでしょう。

きのう思い出していた、あなたの家……わたしの家……あの入り口の扉で月が待ちくたびれた。庭のセドロン (ハーブの1種)、そこを時が薫りながら通ってゆく！

そしてわたしたちが年をとって、前よりひとりぼっちになったのを見て、わたしは感じる、あなたのピアノの中で泣いているひとつのワルツを。そしてわたしは思いはじめる、愛に泣いているのではないのだろうか。

こうして、思い出のせいでわたしは泣く、あなたの家……わたしの家……！ あなたの愛は黄金のケースの中

そして古い伝説はものがたっていく。不当に愛する人から遠くへだてられた男のことを。彼の勇気は、フィクスの木 (ゴムノキ) たちに打ちひしがれた。その木の根は埋葬されている、彼の愛した女性の中に。

かわいい橋、眠りこんでいる。そして谷間のせせらぎのあいだで、抱き合っている、思い出たちと、崖たちと石段たちと。

「ため息の橋」——おまえに守っていてほしい、おまえの心あたたまる沈黙の中に、わたしの秘めごとを。

で枯れている。わたしの愛は、結局は——自分を与えることで——火種がなくなってしまった！

そしてわたしたちが年をとって、すべてがむなしかったことを知って、わたしは感じる、あなたのピアノの中で、泣いているひとつのワルツを。そしてわたしは思いはじめる、愛に泣いているのではないのだろうか。

それは最初の時代だった。眠れずにできた目のふちの黒みをすぐに消えさせ、顔に朝焼けの色を燃やしてくれる時代。そしてある夜——覚えていますか？——ひとつのキスが、桜の木の下で、わたしたちの愛に証印を押した。

愛は結び目にはなれたかもしれない。でもわたしは疑う。闘うことで、かちとることができたろうかと！

ひとつの家は貧しく、もうひとつは豊か……説明は簡単にできる——それはできないことだったと。

### 4. エスクアーロ (鮫) *Escualo* (アルゼンチン)

作曲：アストル・ピアソラ *Astor Piazzolla*

#### コントラバス・ソロ

バンドネオン奏者ピアソラは、1950年代から編曲者・作曲者として、60年代から演奏者・5重奏団のリーダーとして、新しいタンゴの表現法を確立、一般に認識させた人です。真に人気者になったのは70年代になってからでしょうか？

この曲は、数々の浮沈を経て、5重奏団を再編成し、

(比較的) 順調な活動をはじめるときの作品です。1979年、ピアソラは50代の末でした。新しいグループのレパートリーとして、メンバーが演奏して幸せになるような曲をつくった、そのひとつです。忙しくなる前の休養も兼ねて、海岸の別荘で作曲・編曲をしました。たぶん好きな大物釣りに出かけるひまはなかったので、せめてタイトルに夢を託した(?) のでしょう。

### 5. にがいアーモンド *Amêndoa amarga* (ポルトガル)

作詞：アリ・ドス・サントシュ *Ary dos Santos* 作曲：アライン・オウルマン *Alain Oulman*

ポルトガルの名産物のひとつアーモンドは青酸を含んでいるので、死の匂いがします！ 毒なのです！ この曲の作者はポルトガル現代詩の代表者のひとり。一般のファドの枠におさまる作詞もしていますが、この曲は「歌詞」というより「詩」の様式です。作曲者は、アマリア・ロドリゲスさんのために、伝統の根を生かして新しいメロディを提供した、リスボン近郊で生まれ育ったフランス人です。

わたしは、あなたのために話す。そしてだれもそう思わない。でもわたしは言う——わたしのアーモンド、わたしの友、わたしのきょうだい、わたしの愛情の群れ、わたしの家、わたしの貧しい庭、わたしのつばさ。

わたしは、あなたのために生きる。そしてだれもそう思わない。でもわたしはたどる、木いちごと、ナルドの白い小さな花の道を。わたしが追い求める、ひとつの濃い愛情、まわりを、アザミのトゲに囲まれて。

わたしは、あなたのために死ぬ。そしてだれもそれを知らない。でもわたしは待っている、夜明け前の味がするあなたのからだを、

絶望の味がするあなたのからだを。

おお、わたしのにがい、わたしの欲しいアーモンド。

## 6. 割れた鏡 *Espelho quebrado* (ポルトガル)

作詞：ダヴィッド・モウラオン＝フェレイラ *David Mourão-Ferreira*

作曲：アライン・オウルマン *Alain Oulman*

この作詞者（もとはやはり「詩」として書いたものかもしれませんが）もポルトガル現代文学の代表のひとりで、詩人で小説家でした。あの『黒い舟（暗いはしけ）』の歌詞もこの人が書きました。

風は、その鞭で湖の鏡を割る。わたしのなかで受けた傷は、もっと激しかった。なぜなら風は通り過ぎてゆくとき、あなたの名前をささやいていったから。それをささやいたあとで、わたしを置いていったから。

あまり速く通り過ぎたので、わたしの悩みを破壊する

こともできなかった。その悩みの中では、わたしはこんなにしっかりと、変わらずにいる。でも風の通過は、ガラスの面にして刻んでいった、湖に、わたしの奴隷女のイメージを。

おお、あなたのないわたしの両目の、クリスタルの液体よ。むなしく嵐にわたしは頼んだ、わたしを喪に服させる鏡が壊れるようにと。わたしの顔が、涙のない乾いたものになるようにと。

……アイ、あなたのないわたしの両目……あなたのない……わたしのなかでは、もっと激しかった、風が。

### 第2部

## 1. 鱈（たら）の骨 *Espinha de bacalhau* (ブラジル)

作曲：セヴィリーノ・アラウージョ *Severino Araújo*

### コントラバス・ソロ

ブラジル音楽独自の《ショーロ》という演奏スタイル（というか感性）は、19世紀後半から発達したもので、ヨーロッパの舞曲ポルカなどを即興で編曲演奏したのが起源といえます。この曲の作者はブラジル北東部の出身で、父親は音楽教授で吹奏楽団の指揮者、兄弟全員がミュージシャンになりました。本人は10代のなかばに、クラリネットの名手として、そしてすぐにバンドの指揮者としてプロ活動をはじめました。この曲は18~19歳のころ作ったようですが、その約10年後の1945年に、

首都リオで彼が率いるビッグバンド《オルケストラ・タバジャーラ》の録音、ラジオ放送で有名になりました。68年にバンドは解散し、彼は引退したはずですが、その後も特別企画イベントなどに出演。最近では2005年に演奏したらしいです（指揮者は88歳）。

この曲のタイトルは「ヤツカイなもの」というニュアンスから、音楽家のスラングで（演奏したくない）難曲を意味するとのこと。ショーロでもっとも演奏困難な曲だという人もいます。いちばん難しいかどうかは議論があるところですが、とにかくこれをコントラバスで弾くのは「無謀」であることは確かです！！

## 2. わたしのキスしたくちびる *Lábios que beijei* (ブラジル)

作詞作曲：カスカータ *J. Cascata* / レオネーウ・アジヴェード *Leonel Azevedo*

19世紀からブラジルのセレナータ（この国ではセレスタとも呼ぶ）では、ロマンティックなヴァウサ（ワルツ）が人気でしたが、この曲はその伝統を受け継いで、1937年に、素晴らしい声の歌手オルランド・シウヴァが大ヒットさせたものです。今日も恋人に歌うときの定番になっている超有名曲です。

最初の部分をつくったアジヴェードはギタリストで歌手、ラジオ出演もしたプロですが、19才から定年まで電話局につとめました。マイナーの第2部をつくったカスカータは、少年時代からカーニバル・グループで自作の歌詞をうたって人気者でした。

わたしがキスしたくちびる、わたしが愛撫した両手。とある、こんな月夜のことだった。孤独な海がうな

いた。風は、すすり泣きながら頼んだ、あなたがわたしに誠実であるようにと。

あなたはなにも聞かず、去って行った、ほかの愛の腕に向かって。わたしは悩みをうたいながら、泣きながら取り残された。わたしは、いつまでも立っている痛み。わたしはギターと泣きながら日々を過ごす。二度とあなたを見る希望はなく。

神よ、この不幸な者をあわれんでください。わたしの「アイ！」の叫びに同情してください。あのひとの面影はいつまでも清純に、わたしの疲れた網膜にとどまる。

わたしのキスしたくちびる、わたしの愛撫した両手。帰っておいで、わたしの愛の痛みを鎮めておくれ。

### 3. 黄色いシャツ *Camisa amarela* (ブラジル)

作詞作曲：アリ・バホーソ *Ary Barroso*

外国でいちばん有名なサンバ『ブラジル（ブラジルの水彩画）』や『バイア（サパティロ坂で）』を作詞作曲したバンド・リーダーでピアニスト・エンタテイナーだったバホーソが、レビュー劇場の女性歌手のためにつくった曲です（1939年）。1967年に、ブラジル音楽の新しい波の中心にいた若いナラ・レアオンが、この曲を発掘してリヴァイヴァル・ヒット。ここで歌われる歌詞は、ナラさんのヴァージョンです。

カーニバルの大通りで見つけたわたしのヤクザ男は、黄色いシャツを着て、酔っぱらって、今年のカーニバルのヒット曲を歌いながら、お祭りグループにまじっ

てフラフラ行ってしまい……その後やつを見かけたのは、安酒を飲ませる、とあるカフェだった。あぶないラパ通りで、生え抜きのお祭り男は5杯めのカシャーサを飲んでた。

笑い事じゃありませんよ！

カーニバルの終わった木曜日、朝の7時にやっと帰ってきた彼は、わたしに重曹入りの水を頼んだ。もらうとベッドに倒れこみ、1週間イビキをかきつけ、目を覚ますと改心して――

黄色いシャツをつかむと、火をつけて燃やしちゃった。わたしはそんな彼が好き。もう彼はわたしのためのもの！。

### 4. 黄金の小舟 *La Barca de Oro* (メキシコ)

編：アブーンディオ・マルティーネス *Abundio Martínez*

19世紀の作者不明の歌。この曲を初めて楽譜に定着したアブーンディオ・マルティーネスは、メキシコ中央部に生まれた先住民オトミー人で（父は大工で町のブラスバンド指揮者）、ピアノ、ヴァイオリン、フルート、ギター等ほとんどの楽器を弾けました。首都メキシコ・シティで、週末などに公園でブラスバンドで指揮・演奏していました。1914年に39歳で、極貧のうちに結核で亡くなりました。作曲家としては、ヨーロッパ的なロマンティックなスタイルで、ワルツをたくさん書いています。

もうわたしは港へ行く。そこには「黄金の小舟」がいる、わたしを連れて行くはず。

もうわたしは行く。わたしは、ただお別れを言いに来た。さようなら、おんなよ。さようなら、永遠にさようなら。

もうふたたび わたしの目はあなたを見ないだろう。そしてあなたの耳も、わたしの歌声を聴かないだろう。わたしは、わたしの涙で海原の量（かさ）を増やそう。さようなら、おんなよ。さようなら、永遠にさようなら。

### 5. 桜んぼの実る頃 *Le temps des cerises* (フランス)

作詞：ジャン・バプティスト・クレマン *Jean Baptiste Clément* 日本語詞：工藤 勉

作曲：アントワーヌ・ルナール *Antoine Aimé Renard*

1871年のパリ・コミュン（民衆の革命で成立したパリ市政府）の「国歌」として歌われていたとこのことですが、曲には政治思想はまったく入っていません。作詞者は、社会主義の新聞に寄稿したりする政治活動をしていました。この詩の最後の部分は、政府軍との闘いの中で出会ったある女性（負傷者の看護をしていました）の思い出をつづったものらしいですが、その他の大部分は、革命に参加する以前に、ベルギーで書いたようです。やはりベルギーで、ミュージックホールに出演していたフランス人の歌手（もとオペラのテノール歌手）が作曲しました。

わたしたちが桜んぼの季節をうたい、陽気なナイチンゲールと人をからかうツグミが、すっかりお祭り気分するとき……美女たちは頭に狂気をもつだろう。恋人たち

の心には太陽。わたしたちが桜んぼの季節にそうになったら、人をからかうツグミはもっとすてきに口笛を吹くだろう。

でも桜んぼの季節はほんとに短い……

わたしたちが桜んぼの季節にそうになったら、あなたもまた愛の涙をもつだろう。わたしはいつでも桜んぼの季節を愛そう。その季節のものなのだ、わたしが心にしまっている開かれた傷口は……。

そして幸運の女神が、わたしのものになったとしても、もう決してわたしの痛みをいやせないだろう。わたしはいつでも桜んぼの季節を愛そう。そしてわたしの心にしまっている思い出を。

## 6. バーモнос（さあ行きましょう） *Vámonos* （メキシコ）

作詞作曲：ホセ・アルフレード・ヒメーネス *José Alfredo Jiménez*

1930年代から盛んになった、100%メキシコ人ならではの心情と歌詞・メロディをもった、大衆的な歌謡曲のジャンルを《カンシオン・ランチェーラ》（農場風の歌という意味）と呼んでいます。ホセ・アルフレードは、このジャンルに、より深い人間性と豊かな感情、個性的な表現を加えた作者・歌手です。彼の曲は全部、個人的な体験から生まれたらしいので、この曲も、身分の違う（！）女性との恋愛事件がバックにあるのでしょうか。

きょうの歌詞は、彼が女性歌手アマーリア・メンドーサのために補正・加筆したヴァージョンです。

わたしたちは平等ではないと、ひとびとは言う。あなたの人生とわたしの人生は、道に迷ってしまうだろうと。あなたはならず者で、わたしはまともな人間だと。ふたつのちがった人格は、愛し合うことはできないと。

でも、もうわたしはあなたを愛した。そしてあなたを忘れない。そしてあなたの両腕の中で死ぬことが、わたしの夢。わたしには社会階級なんてことはわからない。ただ知っているのは、あなたがわたしを愛しているとい

うこと、あなたをわたしが愛しているように。

わたしたちが平等でなくても、わたしたちはどうでもいい！ わたしたちの愛の物語は、つづかなければいけない。そしてだれかがわたしに言ったように、人生はとても短い。今度は、いつまでもいっしょにいる。あなたゆえにわたしはやって来た。

でも知っていてほしい、わたしはあなたに義務づけはしない。もしあなたがわたしといっしょに来るのなら、それは愛のゆえ。そう、あなたの力のすべてをもって、あなたの人生でわたしがそうであるもの。人にわかるように、あなたがわたしを愛していることが——あなたをわたしが愛しているように。

さあ行きましょう、だれもわたしたちを裁かないところ、だれもわたしたちに、悪いことをしていると言わないところへ。

さあ行きましょう、この世間を離れて。裁判所もなければ、法律もなにもないところ、わたしたちの愛だけがあるところへ。

本日はありがとうございました。  
またお会いできるのを楽しみにしております。

選曲・構成：峰 万里恵  
プログラム作成：高場 将美

インターネットをお楽しみの方は  
どうぞホームページをごらんください。

☞ 峰 万里恵ホームページ  
<http://mariemine.web.fc2.com/>

📎 付録「うたをもっと感じるために」（高場 将美・筆）  
[http://mariemine.web.fc2.com/appendix\\_index.html](http://mariemine.web.fc2.com/appendix_index.html)